

NICU に入院した子どもの母親が行う母乳育児に関する研究

看護学科 助産・母性看護学領域 竹内 彩弥香 助教



Q. どのような研究をされていますか？

A. NICU に入院した子どもが、退院した後の母乳育児の実態と、母親の体験について研究に取り組んでいます。わが国は急速に少子化が進む一方、早産児や低出生体重児などのハイリスク新生児は一定の割合で生まれています。晩産化や高度医療技術の発展も背景に看護のニーズに応え続ける必要があります。特に NICU における母乳育児は国際的にも推進されています。母親は出産直後から母子分離となり、母乳を搾って与えること（搾乳）から NICU での母乳育児が始まります。子どもの成長のために母乳を与え続け、成熟に合わせて直接授乳の練習を重ね、ハイリスク新生児ならではの配慮を伴う授乳方法の獲得が母親には求められます。子どもが NICU に入院中の搾乳支援や、退院に向けた授乳量の調整を含む指導等の支援は普及しています。しかし母親は、子どもの NICU 退院後に直面する母乳育児の困難には指導内容が活かせなかったことや、専門家からの支援が急激に得られなくなる体験をしていることがわかっています。海外では、NICU の退院後 1 年までの母乳育児の実態について先行研究があり、専門的な支援が母乳育児の継続や母親のエンパワメントに寄与することが明らかになっています。しかし、わが国における NICU の母乳育児に関する先行研究は、NICU の退院後 1 か月までの調査に留まっています。子どもの NICU 退院後の長期的な期間における母乳育児の実態と、母親の体験を明らかにし、ニーズの理解に沿った豊かな支援の検討につなげていきたいと考えています。



← WHO と UNICEF が定めた母乳育児成功のための 10 カ条



10 カ条を含む赤ちゃんに優しい病院運動の NICU への拡大 →

母乳育児を促進・推進・支援するための 3 つの基本理念と 10 のステップ
産科医療連携と評価基準のためのコア・ドキュメント

Q. これまでどのような研究をされてきましたか？

A. NICU に入院した子どもの母親が、1 か月以上の搾乳を経て行う母乳育児の体験の本質について研究を行いました。子どもに直接、自らの身体を介して母乳を与えることの、母親にとっての認識や意味付けを明らかにする目的で、非構造化インタビュー調査で得たデータを解釈学的現象学的手法により分析しました。協力者は直接授乳の開始時期が産後 1～2 か月の 4 名で、子どもの在胎週数 26～30 週、出生体重は 500～1400g 台でした。母親の体験の本質を表すテーマとして、【未熟な子どもと不甲斐ない自分と一緒にスタートラインに立つ】、【普通の親子としてリアルにわが子と関係する】、【母乳に込めた願いを子どもに直接届ける】、【子どもの成長と力の証を体感する】、【子どもの欲求に応えられる唯一無二の自分になる】の 5 つが明らかになりました。

Q. 将来の展望をお聞かせください。

A. NICU 退院後まで切れ目なくフォローできる具体的な母乳育児支援モデルや、施設で共通して活用可能な母乳育児支援アセスメントツールの開発、SNS による情報発信や支援グループ構築等の活動への発展です。

もう少し知りたい！と思った方はこちらへ

・助産・母性看護学領域 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/jp/school/health/course/ns/ns_bosei.html

・大学院保健医療学研究科看護学専攻 女性健康看護学領域 URL

➡ https://web.sapmed.ac.jp/jp/school/graduate/health/g_ns/ahfmc00000013wl.html